
GOD EATER -PL/RAYERS-

阪川ヨシカズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O D E A T E R - P L / R A Y E R S -

【Nコード】

N 2 2 7 4 Z

【作者名】

阪川ヨシカズ

【あらすじ】

それは、神を喰らう者の物語。いや、神を喰らう者『たち』の物語。

フェンリル極東支部、通称：アナグラに、初の新型神機使いが現れる。……『二人』。そして、それに導かれるように新型神機使いはさらに集まる。

予定された時計の針は、徐々に狂い始める。さて、狂っているのは世界か、アラガミか、あるいは、人間か。

そして彼らに待つは、神々の樂園か、奈落の底か。

1・PLAYERS（前書き）

これはフィクション。こんな世界は存在しない。だけど、それは未来のことかもしれないし、遠く遠く宇宙の果てで現在進行形で存在しているのかもしれない。

それにかかわらず、あなたはこの物語を否定することができる。あなたの中の『ゴッドイーター』の世界を、壊されたくなければ、すぐに立ち去ることを勧める。

大丈夫、世界は無限に存在するから。

1・PLAYERS

NOW LOADING . . .

「READY . . .」

フェンリル極東支部、通称・アナグラ。旧型神機使いは多くいるが、未だ新型は一人もいない。

．．．だが、ついに適合候補者リストの中に、新型神機に適合するものが現われた。

この出来事は一日とせずアナグラ内に広がり、話題の大半はそれに関連するものであった。それほど、新型は重要視されているのだ。

「新型が入ってくるけどよ、俺たちの立場はどうなっちまうんだ？」

「焦るなよ。先輩面してりゃいいんだ、俺たちや。それにしてもさ、」

新型が一度に二人も入ってくるなんて、珍しいこともあるんだな。

「睦月ケイスケ」

足が、震える。それとも地面が揺れているのか。そんなことは分かり切っているさ、この足の方がおかしに決まっているんだ。

あとは、あとはここに、手を置けばいいんだ、手を置く、手を置け。それで終わり。たったそれだけで、すぐに終わる。一瞬で、一瞬で終わる、そうに違いない。

だから、ほら、さあ。早く終わりにしてしまおう。何のために、親父とお袋を説得してここまで来たっていうんだよ。ほら、早くつ。

だけど、強張った体はそう簡単に動いてはくれなかった。

そうこう思案していると、スピーカーから声が聞こえた。それは、女性の声。

「どうした？ 貴様はゴッドイーターとなるためにここまで来たの
だろう？ それなりの覚悟を持ってここまで来たはずだ。な
らば、この程度のことのできなくては困る。これからの任務はもっ
ときついだろうからな。」

忠告しておく。覚悟がないのならここからさっさと立ち去れ、そ
んなちやちな覚悟でこの仕事をやっていけると思うな！

その言葉を聞いて、胸が苦しくなった。俺の覚悟って、この程度
だったっけ。もしも、このまま帰ったら、帰ってしまったら。

俺の家族は、どう思うかな。

親父は俺の決断を聞いて、ただ一言、好きにしろって言った。けどそれだけじゃなくて、その選択に後悔はないか、って訊いてきた。

あの時の俺は、自信を持って縦に首を振ってたけど、今の俺は、どうなんだろう。

お袋は、……最後まで反対してた。だから、縦に首を振ってくれ
るまで、俺は何度も何度も頼んだ。そして、最後の最後にようやく、
半ば呆れながらも笑って了承してくれた。

そして今からちょうど一週間前に、神機に適合したという
報せが家まで届いた。それはもう、俺は手放して喜んだよ。その時
の母さんの顔は、やっぱり呆れていて、それでいて悲しげで。

それから今朝、家を出るときになって、ようやくお袋がまともに
話してくれた。いや、話したというよりは、俺に忠告した。

『死に急ぐなんて本当に馬鹿ね。一体誰に似たのかしら、ホントに
……。いい？ 絶対、死んじゃダメだからね。遺物で戻ってきた日には
あの世まで殴りこみに行つてやるから、覚悟しておきなさいよ』

覚悟、か。俺の覚悟は、こんなもので、この程度で、破れ
る？ 一瞬の痛みで、俺の覚悟がぶち破れる？

なんだよ。どうして、この程度で俺の覚悟が打ち碎かれるなんて、
思つたんだろつな。本当に馬鹿みたいだ、俺つて。

「俺の、覚悟は。……この程度じゃない！」

俺はそう嘲り笑つて、右手を機械の上に、差し出した。

その刹那、爆ぜる音と共に、これまでに味わったことのない、能動的苦痛が腕から体中へ駆け回る。その痛みは体中から汗と涙と喘ぐ声となって搾取された。

いっそのままで、楽にしてくれ。そんな考えを頭の中から追い出す頃には、痛みは最初から存在しなかったかのように鎮まっていた。

そして、機械の蓋（？）が持ち上がって、俺は腕に輪っかのようなものが嵌まっていることを確認する。そして俺の決意を見届けたかのような声を耳にした。

「決断が遅い。任務中は瞬間的な決断が必要とされる、少しの判断の遅れが命取りだ。 フェンリル極東支部へようこそ、……新型ゴツドイーター」

1441 訓練所エリア廊下

「睦月ケイスケ」

エントランスへ戻る途中、おそらく俺より年上の奴とすれ違う。そして、すれ違う時に彼は質問した。

「急に訊いてすまないが、何をされたんだ？」

どうやら、彼も神機の適合者のようで、今から腕輪をつけに行くようだった。そして、正直に答えて不安にさせるか誤魔化すか迷った拳句、「全然どころか一切痛くないようなことをされる」と、はいはい冗談ですけど何か？ みたいな感じで答えた。

「そうか、それならよかった。感謝する」

そう言って彼は行ってしまふ。

思えば、これが俺とあいつ

の初対面だった。

1442 エントランス

「睦月ケイスケ」

少し迷いながらもエントランスに到着する。アナグラの中は想像よりも遥かに広がった。

さて、指示が出るまで待っていればよかったんだっけ。ソファーにでも座っていようか。

つと、既に座っている人がいた。とりあえずその横に座ることにする。見る感じ、同年代のようだ。服は、ああ、居住区で今流行の服だったような。

「ガム食べる？」

「えっ？」

唐突に尋ねられ、少し焦ってしまった。

「えっと、ガム？ ガムね？ えっと、貰えるものなら貰っておきたいな」

俺がそう答えると、彼はポケットをゴソゴソとするが、…どうやら今食べているので最後だったようだ。それを聞いて俺の口から少し溜め息が漏れる。

「それで、誰だ？」

俺はまず聞くべきだった質問をいまさら口にする。さすがに一言目から「誰だ？」は失礼な気がしないこともないが。

「え？ ああ、俺はコウタ。藤木コウタ。少しばかりだけど俺の方

が早かったから先輩ってことで」

「それは認めない」

これでも競争心は人一倍なもので。意固地って言われても仕方ないよなあ。

「それじゃあ、俺も自己紹介しなきゃな。俺は睦月ケイスケ、ぴちぴちの15歳だぜ」

「あ、じゃあ同い年ってわけか、お互いよろしくな」

それを聞いて、少し安堵する。正直、俺よりも年上の奴ばかりだと思ってたからな。ところで、いつになったら指示が来るんだろうな。

「上官の人が来て説明してくれるらしいけど『うぎいやああいいひいいひいいひアアアアアアアアアアッ……イイイイイウウウうあああああ……！……！……！』」

彼の言葉をさえぎって、突然、施設内に悲鳴が木霊する。受付やらあちこちやらからざわざわと声が上がったが、

「な、なな、なんだよ、今のっ……」

はっしとコウタは俺の手を握る。

「おい、手え握るな、痛い、痛いつて！！」

あ、あれ、椅子が揺れてる？ なわけないか、揺れてるのは俺だよっ。

「確か、腕輪を今つけてる奴いたよな、そ、そいつがほ、捕喰されてっ、」

こ、ここは落ち着いてひひ否定しようぜ、お、俺っ。

「だ、大丈夫だと、おももも、おも、思ふっ……」

そして、騒がしかったエントランスに静寂が訪れる。だ、誰か何とか言ってくれよ、怖いって。

と、エレベーターから一人の女性が出てきた。……第一印象。でかい。どこかは言わない。第二印象。怖い。取って喰われそう。そして彼女は、俺たちの前で仁王立ちになる。そして、凜とした声で言った。
「立て」

……一瞬意味がわからなかったが、立つように命令されているのだと理解し、俺たちは立つ。さながら受刑者のようで、違和感を拭えない。

ところで、この声はどこかで聞いたような気がする。「私がお前らの上官を務める、雨宮ツバキだ。……先ほどの声の原因は黙らせておいたからもう問題はないだろう」

あの人沈黙させられたんだ。なんか良心が痛むなあ。そうこう思いなからあくびをすると、ツバキさんが俺をたしなめる。

「睦月。何を考えているかは知らんが、上官の目の前であくびなどは控える。二度目は蹴り飛ばすぞ?」

「あ、あつ、すみません」

そうだ、ツバキさん、だっけ。この人は俺に帰れって言ったやつだ。思ったとおりやつぱり怖いな……。

「メディカルチェックはサカキ博士の研究室で行われる。睦月は1500から、藤木は1630から。無論、時間厳守だ。……遅れるような真似をしたら、少々手荒な事をするぞ」
「うわあ、絶対に遅れない。というか遅れられない。遅れたらたぶん命はない。」

「分かったなら返事をしろっ!」

「は、はいイっ!」

二人の声が初めてそろった。ツバキさんがエレベーターに乗ってエントランスを去るまで、俺たちは気をつけの姿勢でいた。

「睦月ケイスケ」

ここで合ってるか、不安になりながらも室内に入る。室内には、椅子に座る初老の男性と、よくCMで見かけるここアナグラの宣伝部ちよ もとい、支部長。

初老の男性は、ただただ俺には理解できそうにない機械をいじっていて、こちらに気づいている様子はなかった。

「サカキ博士。……サカキ博士」

せんで、支部長に二度呼ばれて、ようやく応える。

「なんだいヨハン、今は おっと、もう来ていたのかい。予想よりも263秒も早い」

それって要するに制限時間ぴったりじゃないか？ 俺はそこまでルーズじゃありませんっ。

……とは言ったものの、ツバキさんに言われなかったら多分そうしてたと思う。

「それで、めでいかるちえつくって何をするんですか？ まさか、注射とかするんですか？ 他にも注射とか、あと採血とか接種とか点滴とか注射とかするんですよねっ？！」

注射は大っ嫌いだ！ ここでサカキ博士がかぶりを振ってくれなかつたら本気で泣いてたと思う。

「……まずは、自己紹介としようか。私はペイラー・サカキ。ここ

フエンリル極東支部で技術屋、もといアラガミ技術開発統括責任者を務めている」

え？ アラガミ・・・ん？ 統括技術？ あれれ？

「なんですその早口言葉みたいな……。俺には縁がなさそうですけどね」

サカキ博士は、先に用事を済ませたらどうかと、せんで支部長に促す。

「サカキ博士が自己紹介をしたから、便宜上だが私もすることにしよう。名前は知っているな？」

「えっと、……ヨハネスう、……えっと、よはねす、ふおん、宣伝部長？」

あつ、眼光が鋭くなった。もしかしてこれ地雷っぽい？ 地雷だよな？

「……では親切に教えてやろう。私はヨハネス・フォン・シックザール。ここフエンリル極東支部の支部長を務めている。 今後は、間違えても“宣伝部長”と呼ばないように心得ておくように頼む」

へいへい、そうでありんすか、はあ。またややこしい名前付けて、親の顔を見てみたいものだ。……調子のもつてスミマセン。

「さて、本題に移らせてもらおうか。……博士、これまでも重ね重ね言ってきたが、説明中に邪魔はしないように」

ピンポイントに釘を刺した。抜け目がないというか準備周到というか。

「まず、初めに確認しておくが、ゴッドイーターはどのような事をするか、知っているか？」

「ええ、それぐらい知ってますって。アラガミをちぎっては投げちぎっては投げ、瀕死になったらホールドランプで足止めして捕獲

用麻醉だ、」

「どうやら一から説明する必要があるようだな」

あれ、違ったの？ いや合ってるでしょ、ゴッドイーターってそういう職業じゃなかったっけ。

「主な仕事はアラガミのコアの回収及びアラガミの討伐だ。コアはエイジス計画を推進するために使わせてもらう」

エイジス計画。太平洋上に、周囲をアラガミ防壁で覆われた人工島・エイジスを建設し、生き残った人々を移住させるという計画。テレビで何度かエイジスを見たことはあったが、建設は最終段階に差し掛かっているように思われる。だけど、これだけは、これだけは聞いておきたかった。

「この計画が完成すれば、……みんな、みんな、助かるんですよ。俺の家族も、友達も」

その答えさえ得られれば、きっと心置きなく頑張れるはずなんだ。答えのない戦争ほど、馬鹿馬鹿しくて愚かなものはない。

「そのためには精進することだ。私からは以上だ、これで失礼する」

そう言葉を濁して、せん、支部長は退室しようとした。

「ヨハン、ちょっと待ってくれないか？」

不意に博士が呼び止め、せん支部長は少し呆れ気味で応える。

「博士、そろそろ公私の区別をつけては、」

「彼は、この支部の新型神機使いで、まだ若いから。大切にしてほしい。……君一人のものじゃあ、ないからね」

そう言って、意味深に博士は笑った。宣伝部長も、笑った。でも、目は笑っていなかった。

そして彼が退室するまで、俺は放置されっぱなしだった。

「よし、準備完了だ。それにしても、データを見る限り、君の潜在能力は私の想像をはるかに超えているようだ。ここまでとは思わなかったよ。……それじゃあ、そこに横になって、リラックスして。三時間後に目が覚めたら、そこは君の部屋のベッドの上だ。それじゃあ、始めようか」

言われたとおりにする。まず、シールつきの電極のようなものを体のあちこちに貼られる。なんだか少しこそばゆい。心電図が揺れるのがここから確認できるけど、いつもより早いのは、きつと緊張しているせいだ。

次に、酸素吸入の機械のようなものが顔に当てられる。そして、ゆっくりと呼吸をしてくれと博士に言われた。

……すると、急にうつらうつらとしてきて、

……博士の声が聞きとれなくなってきて、

……それが麻酔だと気づいたころには、

……電球が突然切れたかのように、目の前が真っ暗になった。

2002 自室

「睦月ケイスケ」

目は開いたけど、まだ目が覚めきらなかった。頭が冴えないとい

うか、まだぼーっとしてる感じがする。できればもう三十分、たった三十分でいいから寝ていたい。そんな調子で、目が覚めてから既に二時間が経過していた。さすがに、これ以上の睡眠は無粋だな。それにしても、今さっきから断続的に響くくぐもった音はなんだ？ 空っぽのドラム缶を打ち鳴らすような音が、ドンドン、ドンドンと響いている。……部屋の天井が鮮明に見えてきたとき、それがドアを叩く音だと気付いた。

「あ、あつ、はいはい、いまドアのロック外すから」

少し焦りながらドアのロックを解除する。そしてドアが開くと、いきなり鉄拳が飛び込んできて、俺は咄嗟にかわした。不意打ちかよ、きたねえ奴だなあ、おい。

「……貴様のことは、絶対に許さんぞ」

ただ一言が許されるのならば、全く理解不能と言うだろう。それほど彼の襲来は突然で、俺は彼のことを全く知らなかったのだから。「おいおい、いきなり襲ってきて名前も言わないってのはないだろ。まずは名乗ってからにしろよな」

俺の言葉に少し頭に來たようで、顔面目掛けて拳を振るった。怒りに任せた拳は、あまりにも避けやすい。静かな怒り、そっちの方が怖い。なんでかって言われたら、その、……お袋かな。うん。

「お前は俺の何が気に食わないってんだ？ というか先に名前を言っただけにしろ」

それを言ってくれなければ話は進まない。そして彼は質問に答えない。

「理由は分かるな？ 簡単なことだ。貴様は俺に、恥をかかせた。何だか分かるな？」

「いや、だからさ、理由より先に名乗れよ」

すると、少し目線をそらして、……自分の名前が恥ずかしいのかは知らないが、小声で言った。

「 榊レキ、…… 17だ」

榊？ 博士と関係があるのかな。と、苗字の方はどうでもいい。問題は、

「レキい？ またまた女っぽい名前だなあ。やっぱり漢字で書くところ」

「コヨミと書いてレキだ。そっちじゃない」

そっちってどっちだよ、おい。俺も一体何を言いたかったのやら。

「あ、その顔はどこかで確認した覚えがある。記憶領域の中から現在探索中つと。えーとお、確かー、…… ああ、絶叫した奴。そうかそうか。…… んで、俺に逆ギレですか、そうですか」

「違っつ！ 貴様が痛くないと言ったから楽…… に構えてたらこのザマだ！」

真面目だったのか、完全に俺の冗談が通用してなかったんだ、正直者というかバカ正直というか、それとただの馬鹿というか。…… だけど、そんな彼の気持ちも察せず、軽い気持ちで答えたのは、俺だ。

「俺があんなこと言わなきゃよかったんだな、…… 悪かった」

俺が頭を下げると、俺があっさり謝罪したことに少しばかり呆気にとられているようだ。そんな様子をコウタは見た。

「あ、もう一人入ってきた奴いたんだ。ということはまさかこの人が叫ん、」

「おい、貴様。本気で殴るぞ、もうずいぶん噂になってるじゃないか」

「そりゃああんたがあれだけ大きな声で叫んだんだもの、エントランス突き抜けてラボラトリまで聞こえたそうだよ」

ふと、レキは俺に向き直る。

「おい、そっちの名前はなんだ？」

そつちと言われ、一瞬誰のことかわからなかったが、この場には俺とこいつとコウタしかいないのでコウタのことだと判別した。

「ああ、俺？ 俺は藤木コウタ」

「よし、コウタ。こいつの体しっかり押さえてる。大丈夫だ、すぐ終わる」

むんずつとコウタは俺の体をつかみ、しっかりと羽交い絞めにする。そして、レキは関節を鳴ら（そうとするが鳴らないので、鳴らすフリを）して不敵な笑みを浮かべる。くう、コウタ、俺を裏切ったな！！

「何が何だか分からないけど、こうした方がいいような気がするんだよ」

「これ一発でチャラにしてやる。貴様の名前はなんだ？」

「え、えっ、……む、睦月、ケイス」

ケを言う前に彼の鉄拳が人中に食い込んだ。そして脳内が揺れて揺れてそのまま気を失った。

2018 ケイスケの部屋

「神レキ」

「その……すまん。本気でやりすぎた」

「ふあははひんひゅうひはいふほわほおあはっは（まさか人中に入るとは思わなかった）」

別に狙ったわけじゃないのだが、ケイスケが暴れたことと、コウ

タがあまりしつかりと押さえられなかったことで位置がずれてしまったのだ。正確には眉間の少し上あたりを狙ったのだが。ちなみに人中とは口と鼻の間である。あそこに入ると酷く痛い。

「全く、すごい音がしたかと思ったら。もうこっぴつことはしないですよ！」

小競り合いの後駆けつけた彼女が、彼を介抱してくれた。どうやら衛生兵のようだが。髪はセミロングで、それを髪飾りでまとめているようだった。

「……それよりも、わざとらしい。本当はもうまともに話せるんだろっ？」

「ちえっ、バレてたか」

バレバレだ。そして、彼が立ち上がると同時に、腹がなった。コウタはそれがおかしかったようで笑い出す。

「確か、配給のチケットでいろいろ引き換えてもらったっけ。レキが代わりに引き換えに行つてあげたってさ。ほら、冷蔵庫の中身見てみなよ」

一応、俺ができる償いといえば、これぐらいである。しかし、彼がこの程度で許してくれるか。

彼は冷蔵庫を開けると、冷気とともに、ささやかな配給品が入っているのを確認する。まず基本的な野菜。でかいトウモロコシに少し驚いた。あと、レトルト食品や、チューブ状のゼリーっぽいドリンク。そして炭酸や野菜などのジュース。

「よし、俺が引き換えてやったんだから正当な労働賃金としてジュース一本貰い」

「誰がやるかよ！」

俺なりの冗談のつもりだったのだが、真に受けられた。俺が言ったら冗談に聞こえないのか、そもそも冗談ってどんなものだろうか

……？

「とりあえず、俺は自室でゆっくりディナーとしよう。これでも料理は得意だからな」

「ああはいはい、お疲れ様でございました」

小馬鹿にされながらも、俺は部屋を出る。そして腹は、空腹のサインを放った。

2042 エントランス

「睦月ケイスケ」

ツバキさんに俺たちは呼ばれたが、一体何があるというのだろうか？

「よっ、お前らが新入りか」

突然声がかかって、弱虫の俺はビクツと震える。そして、落ちて着いて声がる方向を見ると、一人の男が立っていた。

「え、ええ、はいはい。俺らが新入りですよ」

とりあえず俺は深呼吸をしながら応えることにする。すると彼は、ポケットからタバコを取り出してくわえる。そしてライターの火を、

「リンドウさん、エントランスは禁煙です」

受付の女性に咎められ、渋々タバコをしまう。

「それで、どなたですか。……腕輪を見る限りは、神機使いのようですが」

レキが彼に質問したら、彼は口元に笑みを浮かべて答えた。

「ああ、そうだ。お前らは多分あねう　　雨宮上官に呼ばれているんだろう?」

あれ、いま姉上って言おうとしたよな、それってもしかして。

「よし、時間には間に合ったようだな　　と、リンドウ。こいつらにちよつかいを出したりはしていないな?」

「いいえいいえ。それでは、俺は少しデートに……」

そう言い残して彼はそそくさとエントランスを抜け出す。間違いない。あの男、ツバキさんの弟だな。

「さて、では訓練に行く。主に神機の操作、特に新型は銃形態と剣形態の変形操作について理解しろ。これができなければ、一生ミッシヨンには出られんぞ?」

そ、そんなのはごめんだ。しつかり頑張らないとな、何のためにこの職業に就いたんだ、俺!

そして俺たちは、訓練所へと足を運ぶ。訓練所はたくさんあるよ
うで、今から俺たちが行くのは、第二訓練所。

一体何をするかドキドキしてきた。このドキドキは不安なのか、それとも期待なのか。そんなことは分かるわけがないが、俺たちは戦場への一步を確かに踏み出していた。

2011 第二訓練所

「睦月ケイスケ」

「よし、そこまで」

ツバキさんの声がかかり、俺は足を止める。……神機はこんなに

も軽々しいのに、膝が笑っている。体力には自信がある方なんでしょうな。

「最初は神機に慣れていないから大抵そうなる。じきに治まるだろう」

……とりあえず、一通りの動作を学ぶことができた。通常は一人ずつの訓練らしいのだが、やはり三人まとめて入隊されたのが面倒だったらしく、一度に行ったそう。そして、ようやく終了の時間となったので今日はひとまずこれで解散だそう。

ちなみにレキ（あとで年上だからさん付けにしろと言われた。殴っておいでそれはないから呼び捨てにさせてもらう）と俺は、同じメニューをこなしたが、コウタはまた別のメニューだったようだ。旧型と新型の違いってのはこういうところで現れるわけか。

「明日の朝はくれぐれも、遅れないように。少しでも遅れたら休憩はなし、予定の時間の二倍は動いてもらうことになるから、覚悟しておけ」

そう言われたら絶対寝坊する気なくなる。早く休みます、ばつちり寝て早起きします。

「ふう、やっと終わったか。あー、疲れたな」

レキとコウタは地面に仰向けになっている。俺はそこまで疲れてはいない。わけではない。だがへばったら負けのような気がする。なのでそういうことはしない。

「んじゃ俺はジュース買って来るから、コウタも欲しかったらついでに買ってきてやるよ」

「おい、俺は」

コウタの分だけ聞いて訓練所をいったん飛び出した。後ろからばかりやるーって声がかかったけど気にしない、あーあー、聞こえないの言葉ー。

自動販売機の前に到着。さて、コインを投入　あれ？

「こ、これどうやって使うんだよ、おい。硬貨投入口どこだ？　居住区に合ったやつと違うぞ？」

これは参った。さすがに手ぶらで帰るのも悪いし、うーむ、どうすれば買えるんだ……？

「ああ、お前がうわさの新人か。こんなところで何やってるんだ？
え？　あ、え、えっ……と……」

2013 第二訓練所

「榊レキ」

「まったく、俺の分はないってのは冷たい奴だな」

俺は溜め息をついて、そう愚痴る。

「そりゃあ恨みでしょ。痛そうだったし、あれ」

言い返せない。確かにあれは俺が悪かった。もっと謝っておくべきだったか。

「ところで、聞きたいことがあるのだが。……なぜゴツドイーターになっただんだ？」

俺はなぜかそんな質問をしてしまう。やっぱり疲れているみたいだな、今の俺は。

「なんで……って。かーちゃんと、ノゾミ　ああ、妹のことだけどさ　ノゾミたちをさ、守りたいんだ。……俺が守ってやらないと、二人を笑顔にしてやれないからさあ」

強い奴だ。俺よりも年下のくせに、信念を持っていて、
…とても妬ましくて、自分がとても、
「……情けないな、……俺は……」
自分に向かつて、そう呟いた。俺は、……逃げた。全てを投げ出
して、目を背けた。だけど、仕方ないんだ。仕方なかったんだ。
…耐えられなかったんだ……。

「じゃあさ、レキはどうなんだよ。何か目的があってなったんだろ
?」

コウタの問いに俺は答えられない。だから俺はサツと立ち上がり、
神機を持って黙って退室しようとする。

「……おい？ そっちが先に質問したんだから答えてよ」

「……すまない。……今の俺には、……答えられないんだ」
俺はそう言っただけで逃げるように部屋を去った。

2015 訓練所エリア廊下

「睦月ケイスケ」

「ほら、こつやつたら出るぞ」

そう言っただけで彼は腕輪を電子部分に当てた。するとガコン、という
音とともに、コーラが2本出てきた。

「支払い腕輪でできるんだ。……そういうの一切聞いてなかつ
たからなあ、ははっ。てつきり現金かと」

俺は苦笑しながらそう呟く。

「ほい、コーラ2本でいいんだろ?」

彼は缶を渡すと、その場から去ろうとする。

「あ、えつと、代金は？」

「そいつは奢りだ、入隊祝い。いつか同じ任務に出られるといいな！」

笑って、彼は立ち去って行った。……入隊祝いなら、悪い気はしない。

「大森、タツミさんか。いい人だったな」

俺も、彼のような人と任務に出たいと思った。

これ以上コウタを待たせるのは悪いので、さっさと戻ろうか

と。……ん？

「あれ？ レキ？」

「」

レキは、何も言わずにすれ違う。ということはもうすぐコウタも来るかもしれないな。

……だけど、彼の顔は、あまりいい表情には見えなかった。どうしたんだろうな、一体。

「あ、いたいた。何してたんだよ、すぐに買ってくるかと思ったのに」

と、コウタが走ってきて話しかける。

「いやあ、買い方が分からなかったんだよ、ほら、居住区のと違うだろ」

俺はとりあえず弁解して、すぐに分かってもらえた。コウタはしっかり聞いていたようだ。意外だな。

「ところでどうしたんだ、レキの奴？ あんまりいい雰囲気じゃなかったみたいだけどよ」

「いきなりさ、なんで入隊したのかって質問して、答えた後にレキ

はどうなんだって訊き返したら、あんな様子になっちゃって」

「要するに地雷踏んだってことだな。そのうち機嫌も直るだろ、ほっとけばいいさ、ほっとけば」

コウタは、「そうかな？」という顔をしたが、勝手に納得したよ
うで、俺から受け取ったコーラのプルタブを上げて飲み始めた。俺
も做ってプルタブを上げ、揺らしすぎた炭酸飲料の洗礼を顔に受け
る。

「うわっぶ」

0629 第二訓練所

「神レキ」

「時間には間に合ったみたいだな おい、起きてるのか、お前
ら」

立ったまま寝息を立てる二人。こいつら、どこでも眠れるのか？
「気をつける。ツバキ上官が爆弾を持ってきたぞ」

ビクツと二人は震えあがり、目を覚ます。ちなみに言っておくと、
爆弾ではなくスタングレネードである。

「このの名称は分かるな、睦月」

「えっと、……閃光玉？」

馬鹿か。それとも寝ぼけているのか？

「スタングレネードだ。覚えておくようにな」

ツバキさんは直視しない方がいいと言ってピンを抜き、地面に叩
きつける。すると、閃光がほとばしり、爆音が鳴り響く。目をつぶ
ったが、目の前が白んだし、耳がじりじりとなって痛くなった。

「こいつはアラガミにも通用する。使い方は簡単だ。ピンを抜いて、地面に叩きつける。お前らにもできるだろう?」

「無論だな」

俺はスタングレネードを受け取ると、ツバキさんがやったようにピンを抜いて叩きつける。

「うおっ、眩しいっ!」

少し目の前がチカチカしてしまふ。閃光と音が収まると、コウタも一つ受けとった。

「じゃあピンを抜いてっつと。えい!」

ワンバウンドして、時間差で閃光を発した。どうやら力が少し足りなかったようだ。これではアラガミに隙を与えてしまふ。

「それじゃあ俺も一つもらいつつと」

ケイスケは、ツバキさんからはっしとスタングレネードを取ってピンを抜いた。

「てえい! ……あれ」

思いつきり地面に叩きつけたように見えたが、不思議と反応がない。不発のようだな。

「なんだよお、俺がやった時だけこれってありますか?」

そう言つてケイスケは不発弾を拾い上げようとする。おいよせっ、こいつ、寝ぼけてるのか?!

「ば、馬鹿っ、よ、よせ!」

ツバキ上官が制止しようとするも、彼は聞かない。

「大丈夫ですって、ツバキさん、これぐらいどうつてこと、」

案の定、マグネシウムはその一瞬で反応を連鎖させ、辺りが真っ白になる。俺たちは咄嗟に目をつぶったが、ケイスケは間に合わな

かったようで、閃光の直撃を喰らった。
そして再び確認すれば、果たして彼は倒れていた。

「お、おい、ケイスケ！ 大丈夫かよッ?!」

「睦月！ しつかりしろ、睦月!!」

どうやら、完全に失神しているようなので、俺とコウタで病室まで運ぶことになった。面倒な真似を……。

0652 病室

「睦月ケイスケ」

「ん?」

今さっきまで訓練所にいたはずだが……おかしいなあ。なんで俺、寝てたんだ？ しかもここって病室じゃねえか。

「ああ……、……そっか」

寝る前のことを思い出す。確か、不発のスタングレネードを拾おうとしたら、目の前で暴発して、そのまま昏倒してしまったんだっ
たっけ。

「んあ、ツバキさん」

気づいたら横にツバキさんが立っていた。オーラが出てる。キレてるよ、絶対キレてるよこの人。

……そして、とりあえず彼女は一呼吸おいて言った。

「普通の奴はあんなことはしない。どうしてあんなことをした？ 私には理解できない」

「いや、あれはその、……知らなくて……」

「知らないじゃ済まされないこともある。だが、私が怒っているのはそういうことじゃない。……私の忠告を軽んじたことだ」

「っ、……それはっ……」

要するに、ツバキさんは俺が失敗をしたことを怒っているのではなく、それを防ぐための忠告を聞き流してしまったことに怒っているのだろう。……甘く、見過ぎていた。

……俺が何も言えないでいると、ツバキさんは溜め息をついて、俺にとつて最も恐ろしい言葉を口にする。

「向いてないのかもしれないな、ゴッドイーターに」

心が抉られた。この感覚を、知っている。入隊した時の、あの躊躇いするとき。……でも、その時とは比べ物にならないくらい、心が痛くなった。

子どものころからずっと、ゴッドイーターにあこがれていた。でも、親にはなかなか言い出せなくて。そして、初めてなりたいたったとき、両親そろって向いていないと言った。

あのころのデジャヴ。嘘だ。嘘だ嘘だ。俺は、強くなったんだ。たぶん、いや、きっと強くなれる自信があるんだ。それを否定されて、俺は……俺は。

「そ、そんな、違いますって！ 確かに俺、非常識なところとかたくさんありますし、もっとたくさん迷惑かけるかもしれない！ それに、それにっ　俺、ただの馬鹿ですし！」

吹っ切れてしまふ。もはやどうしようもない領域、自分で自分が嫌になる。だから、それを聞いて、ツバキさんが少したじろいだよ
うに見えた。

「馬鹿だけど、精一杯がんばりますよ！ みんなの邪魔にならないように戦って、誰ひとり傷つけさせない！ あいつらだって、親父も、お袋もっ！ たとえ俺がゴッドイーターに向いていようとなくろうと、俺は絶対に、強くなるっ！..!」

こうなつたらもうヤケだ。やけくそだ。それはきつと、あのとときずいぶん時間をかけなければ得ることが叶わなかった、覚悟に違いない。なんで今になってこんなにすんなりと出てくるのだろうか？

そして、そのわけを自分で言いながら理解する。俺がただの、馬鹿だからである。馬鹿の俺が、追い詰められた末に見つけ出した、一つの決意。

そんな俺の熱弁を聞いて、ツバキさんは含み笑いをした。おかしかつたのだろうか。笑いたいやつは笑えよ、これが馬鹿の俺の全身全霊の覚悟の表現だ。

「いや、……本当に、若いころのリンドウにそっくりだと思ってな。確かに、向いている、向いていないじゃない。強くなる奴は強くなるし、変わらない奴は、いつまでも変わらない。……変わらない奴がなぜ変わらないか、分かるか？」

俺は考えるが、……やっぱよく分からない。すると、ツバキさんは答えた。

「 変わらない奴は、変わろうとしないからだ。変わりたいと思わないから、変わることができない。だから、強くなりたいと思う奴は、絶対に強くなる。それが心からならば。」

貴様のような奴は、大抵私がそう言ったらもう少し気の利いたことを言うのだが、それ以上の答えだな、これは。素晴らしいゴッドイーターになれると信じているぞ。……睦月」

「は、はい！」

なんだか心が温かくなったような気分。ツバキさんが、こんな人だとは思いつまなかった。……なるほど、だからこそ俺は、ここ極東支部のゴッドイーターにあこがれたんだ。

「さて、しつかり休んだのならば、いよいよ本番だ。初めての任務だ。……いいな？ 時間に遅れたらそれ相応の罰は受けてもらう」
やっぱりいつもどおりのツバキさん。でも、それがいい。

だから、自信を持って返事をする。本当は、もう一度ベッドに潜り込みたくなるほど怖いのにな。でも、覚悟と決意を言ったからには俺は、守るために、強くならなくちゃならない。

「……はあああああ、……ふうふうふうふう。よしッ！」

ゆっくりと深呼吸。そして俺はベッドを飛び出す。

そして病室を飛び出して、……廊下で足を滑らせて思いっきり転んだ。万事オーケー。

1・PLAYERS（後書き）

やっちゃった。やらかしてしまった。・・・処女作にして、歴史がグレーになっていく。

いやいや、こんな調子じゃだめだ。読んでくれている人がいるならば、頑張らないと！ というわけではじめましてこんにちは。

今回のコンセプトは、『主人公がたくさんいたら？』ですね。無論、本編では一人で、こんなにおしゃべりじゃありません。だからって黙らせておくのはかわいそうでしょう？ いや、この理屈はおかしいか。

まだ一話目なのに、こんなに飛ばしちゃっていいかなあと思う。とりあえずアリサは出そう（笑）

それでは、また次回まで。

2・OPEN FIRE

0712 エントランス

「睦月ケイスケ」

「おいおい、遅いよー」

「ごめんごめん、寝坊しちまってさあ」

「……何が寝坊だ、今後はあんなへまはしないでくれよ」

「ばつちり俺が下手こいてぶっ倒れたってことはバレてる。そりゃその場に居合わせたんだもんな。」

「それで、初任務ってなんだろう？ ワクワクしてきたよ」

「俺は足ががくがくしてきた。あんなに意気込んで病室飛び出してきたのにさ、もっと俺に勇気とかがあればなあ。俺のかいしよなし！」

しばらく待っていると、煙草の臭いがした。見ればそこにはこの前会った……誰だったっけな。

「ん……と、確か。リンドウさんでしたっけ」

「リンドウさん？ ちょっと脳内散策ーっと。……ダメだ、顔と名前が一致しない。」

「また会ったな、新入り。お前らを任務に同行するのが俺の任務ってわけだから、今後ともよろしくな」

「とりあえず俺はよろしくお願いします、と頭を下げる。続いてコウタ、レキと頭を下げた。」

「ところで……一つ質問するが、お前ら全員一遍に、任務に連れて行かないやいけないのか？」

早速、リンドウさんが頭をポリポリと掻きながら言った。

「ツバキさんがそう言ってたんじゃないですか？ 俺たちは初任務、としか聞いてないんで」

「確かに俺はあねう、上官殿に一任されたが……三人はちよいときついぞ？」

リンドウさんは、少し考える素振りを見せる。やはり彼一人では俺たちは手に負えないのか？

「あ、リンドウ、ここにいたのね。部屋にいてもいなかったから少し探したんだけど」

鈴を転がすような女性の声が俺たちの背中から掛かった。もちろん俺たちは背を向けているから見えないけど、リンドウさんはその女性を見て少々表情が和らいだように見えた。知り合いかな。

「ちようどよかったサクヤくん、ちよつと手伝ってくれないか？」

……ああ、なるほど、リンドウさんが何をしたいか分かった。

「内容にもよるけど、ところで聞くけど、この子たちが新しく入ってきたのかしら？」

「ああそうだ。おっと、自己紹介を忘れていたな。俺は雨宮リンドウ。苗字を聞けばわかるだろうが、あのツバキ上官の弟だ」

この前のツバキさんの反応で何となく感づいてたけど、あんまり似てないや。

「で、こつちが、」

そう言ってリンドウさんは、女性にこちらへ来るよう促す。そして目の前に現れた女性を見て、……男なら誰もが見惚れる体系に少し愕然、そのうえ露出度の高い服を着ていることに啞然、そして胸部に見ゆるは……ゲフンゲフン！ れ、冷静になれ、俺！

「私は橘サクヤ。リンドウが迷惑かけたら私に言っただけ、あ、でも私よりもツバキさんに言っただ方がいいかも……」

「おいおい、勘弁してくれ」

サクヤさんが笑って、つられて俺たちも笑った。そして一通りの自己紹介を終え、サクヤさんは切り出す。

「それで、何を手伝えばいいのかしら？」

「こいつらを任務に連れて行きたいんだが、一度では俺一人だけだと手に負えないからな。誰かを手伝ってくれないか」

サクヤさんも俺たちと接触できるチャンスを探っていたようなので、快くOKしてくれた。

「んじゃあ、話し合いでもジャンケンでもなんでもいいからさっさと決めてくれ」

「俺はサクヤさん」

「俺もサクヤさん」

「フン、……俺も、その、……橘さんがいいが」

「っておい、ちよつと待てガキども」

そりゃあこんなおっさんよりかは、サクヤさんと一緒の方がいいに決まってるよな？

あ、少しリンドウさんの顔がこわばってきた。まだ辛うじて笑っているけど、目元が引き攣ってる。

「よし、ジャンケンだ。一番に負けた奴がリンドウさんとデートだぜ」

「おい、何の罰ゲームだこれは」

「妥当じゃないか。俺は構わない」

「うん、いいと思うよ」

「そしてなぜ了承する」

リンドウさんのツツコミを無視して、三人の手が同時に出される。さて、誰が負けるのか？ ちなみに俺は結構ジャンケンに強い。結構強いんだよ、ホントに。

自信を持ってカツと目を見開くと。

「睦月ケイスケ」

「ぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶつぶ……」
二人はパーを出した。おかげで俺はこのおっさんと一緒ですか、はいそうですか。

「……俺のこと、どう思ってるか正直に言ってくれ。怒らないから」
「とつても頼りなさそうに見えるし、すぐにリスポーンしそうな感じがするぜ」(すごいと思いますよー、俺の上官にはとつてももつたいたいと思いますー)
「本音と建前が逆だが」
しまったと思った時には時すでに遅し。微妙に怒っているように見受けられる。
「それに俺のことは見くびってもらっちゃあ困る。一応姉上の弟だからな、相当強いぞ?」
確かにそれも一理ある。なんせ彼は『あのツバキさん』の弟だからな……。

「それじゃあちゃっちゃと始めちゃいましょうか、もうミッションは始まっていますよ」
「まあ待て。まずは上官から新入りへ出す三つの命令だ。言う通りにすれば何事もうまくいくだろう」
おお、折角だから聞いておこうか。強くなるためだからね。はやくはやくと少し急かしてみる。

「簡単なことだ。『死ぬな』、『死にそうになったら逃げる』、『それで隠れる』。『運が良ければ隙を突いてぶっ殺せ』。な、簡単だろう?」

「それ全部で4つです」

それを言つと、リンドウさん自身も気づいたらしく赤面した。やつぱり大丈夫かどうか不安になってきた。ホントに強くなれるのかな……?

……でもこれって、新人全員に言ってるってことは、まさかこれも計算のうち? そうだったなら、地味に謀略家かもしれない。たぶんないと思うけど。

「とにかく、そのルールを守れば一人前のゴッドイーターになれるんですよね?」

「ああ、命あつてのモノだからな。それじゃあ、そろそろ行くでしょう。できるだけ静かにしろよ」

リンドウさんがゆっくりと歩んでいく。俺はその後ろをゆっくりと付いていく。そして、目標を視界に捉えた。そいつは、この世にいてはいけない、鬼の形相でそこに居て。

夢中で何かを食べているようで、こちらには気づいていない。よく見ると、……金属の塊のようだが、よく分からない。

「……確か、オウガテイル、でしたっけ。近くで見るとやっぱり迫力がありますね」

「しつ、黙つててくれ。できるだけ背後を狙うんだ。大抵のアラガミは奇襲が良く効くからな……」

少しずつ、目標に近づこうとする。足元に気をつけて、出来るだけ気配を消して、ただ音をたてないように進んで、……敵の背後に回り込むことができた。

「捕喰の方法は分かるな? 捕喰形態に切り替えたら一気に喰らえ」
それぐらい分かっている、たくさん訓練してきたと、心の中で

ボヤきながらも捕喰形態に切り替えて、……喰らう。黒い血のような液体が、ピシャツと顔に飛び散って少したじろいだ。

だけど、それ以上に気分が高揚して、体が軽くなったような気がする。訓練でもそんな感じになったが、えっと、バースト状態だったっけ。神機が活性化しているらしいからドンドン攻撃するといひそうだと。

「それじゃあ思い切っけていきますから。リンドウさんは遠くでゆっくりお茶でも啜っけてくださいよ」

俺は調子に乗っけてそんなことを口にしてしまう。訓練であれだけやっつたんだ、こんな奴、一人でも片づけられる。片づけられなきゃ、……俺は強いゴツドイーターに、なれないんだ。

「本当に大丈夫なのか？ 後悔しても知らんぞ？」
軽い口は、当たり前ですよと言った。

「……よし、分かった。危険が迫ったら手助けに行く、それまでは絶対に手は出さないぞ。それでいいんだな？」

リンドウさんの問いかけに縦に首を振っけて、俺はオウガテイルに『ノコギリ』を振りおろした。彼の手は、煩わせない。

「ちえっ、はずしちまったか。次は当てる！」
突進をかわっけてからのステップ、そして斬り払い。神機の刃が目標の足に入り込む。

……ところで、どうでもいいことだが。俺がショートでもロングでもなく、バスターを選んだのにはちゃんと理由がある。ちなみにレキには一瞬で看破された。

『強そうだから、だろ』

『な、なんで分かったんだ？』

『おまえの性格からすればその答えしか思いつかなかった。単純と

「いっか、浅はかだな」

一発ぶん殴ってやった。年上だからってなめるなよ、同期なんだからな！　そしたらやっぱり殴り返された。痛かった。

「バスターの大技と言えばチャージクラッシュだけど、うまくいくかな」

そう呟きながら剣に力を込める。バースト状態のときは早く力が溜まるってツバキさんに聞いたからな。自分に自信を持つと、絶対に決める　よし、決める！

「うおりゃあッ！」

だが、惜しくもその一撃は避けられてしまう。そしてから空きになった懐目掛けて、オウガテイルは針を飛ばした。

「は、針だあ？！　そんなことデータベースには載ってなかったぜ？！」

俺は針を辛うじてサイドステップで回避しつつもリンドウさんに目配せをする。あくまで、手を出さないでいるようだ。……要するに、自分で蒔いた種なんだから自分でどうにかしろってことか。

……てか電話してる？　電話してるよね！　なんでこんな時に電話なんかしてッ？！

すると突然、身体にえも言われぬ倦怠感が押し寄せる。バースト状態が切れてしまったようだ。それを見計らってか、オウガテイルの攻撃が激しくなってきた。

俺にしてみればとてつもなく危険な状態で、防戦一方、といった感じだが、傍から見ればあまりにも滑稽。舞台の上で踊る道化。

そして込みあがるのはこんな奴にも勝てない、という無力さ。どうすれば勝てるか、という思考が緩慢になってきている。

このままじゃどうにもならない、そう考えた俺は思考を回転させる。相手を足止めするには？ ホールドトラップ？ 駄目だ、仕掛けている場合じゃない！ ならばさらに耐えるか？ だがスタミナが足りない！ どうすりゃいいんだ、どうすりゃ！ 考える、考える、考える考える！！

「えっと、えっと、そうだ、えっと、せ、閃光玉！」

慌てるな。スタングレネードだ、閃光玉じゃない。自分にそう言い聞かせながら震える手先で何とかスタングレネードのピンを抜いた。そして地面に叩きつけて、急いで耳を塞ぐ。

敵が奇声を発し、よろめいた。チャンスだつてことは分かっているけど、それで、それでどうするんだ、攻撃する？ それとも一時退却？ ああ、落ち着け、落ち着け落ち着け落ち着けお、ち、つ、けっ！！

「わッ?!」

俺が狼狽している隙にオウガテイルは飛びかかってきた。回避が間に合わず、俺はオウガテイルに押し倒される形で地に伏す。そして、その牙が左腕に喰い込んで、俺は苦痛な悲鳴を上げた。

「新入りイっ!!」

遠巻きで見ていたリンドウさんがついに耐えかねて駆けつけた。そしてロングブレードでオウガテイルを斬り払う。再びオウガテイルからは体液が飛び出して、彼のロングブレード 『ブラッドサージ』は真っ赤に染まる。……真っ赤な血と、青空の対比。そんな、どうでもいいことを考えてしまう。

そして、オウガテイルが倒れこんだ隙に、俺はリンドウさんに連れられてちょうどオウガテイル目標と反対の地点へ行く。そして俺は地面に倒れこんだ。

「リンドウさん。……思った以上ですね、あいつ……い、いだった！」
死ぬほど痛いってほどの痛みじゃない。でも、擦り剥いた程度の痛みじゃない、……喻えるならば、包丁で指を切ったところに塩を塗りこんだような痛み。

強がってた俺が馬鹿みたいだ。戦場は、そこまで生温くはない。この痛みを以って、それは知らされることとなった。

「とりあえず傷を見せる。……よし、これぐらいなら大丈夫そうだ」
リンドウさんは包帯を取り出すと、器用に俺の腕に巻きつける。
うまいですねと俺が言ったら、サクヤさんに教えてもらったそうだ。そうか、サクヤさんは確か衛生兵だった。

「やれやれ……とりあえずこれでなんとかなるだろう。痛みは侵喰が原因だ、回復錠は持ってきただろ？ そいつを服用すればとりあえず侵喰をある程度は防ぐことができる。本格的な治療は帰ってからだ、今は我慢してくれ。」

……今さっきは、一人で行くことを許したが、その結果どうなったかは、分かるな？ 一人での戦闘は極めて危険だ。実戦経験のない奴がおいそれと行うのはよせ。……手遅れになられたら俺が困る。
俺は、お前らが所属する第一部隊のリーダーだからな。メンバー全員の命を背負ってる。だから、誰一人として欠かすつもりはない。新入り、お前らも含めて、な」

……この人、リーダーなんだ。そして、俺は彼の意志の強さに、感銘を受けた。さすが、ツバキさんの弟、いや、さすがリンドウさんと言ったところか。俺の目標が、一つ決まったような気がする。彼のようなゴッドイーターになろう。彼よりも、上を目指そう。

俺は回復錠をポーチから取り出して一錠飲む。リンドウさんの言

に喰いついた。狙いは完ペキだな、俺ってサイコー！

「よし、いい感じだ。もうすぐ仕留められるんじゃないか？ とどめぐらいは気持ちよく決めたいだろう、もうこいつは相当弱っているから思いつきり決めてやれ」

俺はリンドウさんが言っていることを察して、剣形態に切り替えて近づく。オウガテイルは起き上がるも、血のようなものを吹き出し再び倒れた（確か、フアンブルだったっけ）。それを尻目に剣に力を込め、今さっきの痛みに対する恨みを少し籠めて……思いつきり、振り下ろしてやった。

その一撃は、オウガテイルを真つ二つに切り裂いて、返り血を剣いっばいに浴びせる。

もう、オウガテイルは動かない。既に、生命上に必要な活動を停止している。……それでもまだ生きているのがオラクル細胞。そう思うととても恐ろしい。

「よし、……任務完了だ」

「できた。できたんだ、……俺。倒せたんだっ

……！」

血まみれの手で笑っている俺は狂っているのだろうか？ それとも、俺を狂わせるこの世界が狂っているのだろうか？ 武器を持って敵を討つことが正義なのだろうか？

そんな難しいことは、今はどうでもいい。ただ、俺は、勝利の余韻を味わうことを、楽しんでいた。

「あいたあー！」

「ん？ どうした、また痛みだしたか。それにしても、ここまで派手にやる新入りは見たことがないな。たぶん、おまえが一人目だ」

嬉しいようで嬉しくない。そりゃそうだ、褒めてるようには思えないし。

……と、ヘリが来る。いつの間にかリンドウさんが任務完了の連絡を取っていたようだ。

「ところでケイスケ。コアは回収したか？」

「……………あ」

辛うじて死体が残っていたからさっさと捕喰してコアを回収する。というか本来の目的はこっちなだから、忘れては困る。これで万事OK。俺たちはヘリに乗り込んで、アナグラへ帰投した。

0821 嘆きの平原

「榊レキ」

吹き荒れる嵐、気候は最悪。ジメジメとしている上に、少し肌寒い。雨足はそこまで強くはないが、俺たちの服を濡らすには十分な量である。

「橘さん、」

「あ、私のことはサクヤでいいから。それで、何かしら」

「それじゃあサクヤさん。……………雨が降ってない時の方が、安全に任務を進められると思うのですが」

俺がそう言うと、コウタが俺を小突く。なんだってんだ？

「知らないの？ ここ、ずっと雨が降ってるんだよ」

「そうなのか。……………それは初耳だな」

討伐対象のアラガミについてはしっかりと調べたが、肝心のフィールドについて調べるのを忘れていた。やはり俺は詰めが甘いなど、しみじみ感じる。

「それにしても変わってるね。時々このあたりで中継行われてるからさ、いつも雨が降ってることくらい知ってると思ってたけど……」
「悪いが、新聞は経済に関するもの以外は取っていない。あと、テレビはもう家にない。……正直に言うと、昨日エントランスで久しぶりに見たときは小さい頃が懐かしくなった。本当に、あの頃はよかったと思う、……あの頃は……」

場の空気が徐々に重くなっていくことをその身に感じ、サクヤさんが咳払いをしてくれるまで、俺の心の中はどんよりとしていた。

「あ、これはその……すみません」

「とにかく忘れる、もうすでにミッションは始まっているわ。マップを一度確認してみてください」

俺はポーチにあらかじめ入れられていたマップを取り出して、確認する。

「この矢印が、俺たちですか。腕輪のビーコンで位置を表示してるんですよね」

「そうよ。よく知ってるわね、結構調べたんじゃないかしら」

物覚えはいい方なので、あまり調べたわけではないが、一応『ゴッドイーター・ハンティングガイド』は一通り目を通した。……操作説明書ではないのは確かである。

「じゃあ、この赤い丸はなんだろ？」

「これがターゲットのアラガミ。ほら、ここから見えるでしょう？マップだとあっちの方向だから、」

俺たちが向いた方向の先には、紡錘状のアラガミが見えた。このマップは常に腕輪（装着者）から視覚情報等を受信しているため、アラガミを視界内にて視認することができた場合、もしくは一定距離以内にアラガミが接近した場合、マップに表示される。逆にいえば視認できなければ場所は分からない。

その場合は超視界錠という薬品を使用するか、もしくは同等の効果を持つスキルのついたパーツを装着することで、腕輪の精度が一定時間向上するため、フィールド全体にアラガミの位置を確認することができる。

「……おい、レキ、レキい」

「ん？ なんだよ」

「ん、じゃないよ。何ぼーっとしてるんだよ」

コウタに呼ばれて我に返る。つい講釈垂れてしまったようだ。しかし、誰に話していたんだ、俺は？

「視認できる限りでは、渦を中心として三時の方向に一体、九時の方向に一体。・・・目標は三体だったような」

「渦の裏に隠れてるんじゃないかな、見えないだけで」

恐らくその可能性は高いだろう。そして、心身ともに準備はできたので俺たちが行こうとすると、サクヤさんが止めた。

「これはリンドウの受け売りなんだけど、一応言っとかなきゃね。

えっと、……『死ぬな』。『死にそうになったら逃げる』、『そんなで隠れる』っ。運が良ければ……えっと、なんだったかしら。運が良ければ？」

しばらく考えた挙句、サクヤさんは携帯端末を取り出して通信を始める。誰かと話してみたいだ。

「……もしもし、リンドウ？ ……えっと、運が良ければなんだったかしら？ ……だから、リンドウがいつも言ってる、……そうそ

う、それよ。最後の運が良ければの下り。……そう、分かったわ、気をつけてね」

そう言って通信を終了する。

「運が良ければ隙をついてぶっ殺せ、だそうよ。リンドウらしいわね、ほんと」

リンドウ上官と話していたのか。ということは、まさか既にケイスケたちは任務を終えているのか？ ……く、こうしちゃおれん、さっさと俺たちも済ませないと。

焦れる心を抑えて、次にサクヤさんは連携について話し始める。

「あなたがアラガミに張り付いて、援護射撃をコウタと私で行う。回復の方は私に任せて、しっかりカバーしてあげるわ」

「基本的に俺はバレットの方を多用しますが、剣の方も大丈夫ですよ」

俺の神機の刀身はショート。手数でカバーしつつ、消費したオラクルを回復する。そして銃身はスナイパー。射程もあり、貫通性能も他の銃身に優っている。文句無しでこいつが一番だろう。

「それじゃあ攻撃を交えつつも後退して撃つ、要するにヒットアンドアウェイだけど、それもいいわね。どちらでも好きな方で構わないわ。 ……さて、長話もおしまい、本気出していくわよ。時間はまだまだ余裕が、」

彼女が最後まで言い切る前に、アラガミの声が木霊する。 ……その声は禍々しいが、たった三体だし、小さい。 ……しかし、サクヤさんの顔が曇る。

「 ……ちよつと急いだ方がいいかもしれないわね。リンドウ的に言うなら、やばい奴が来ているっていうのかしら」

……どうやら、アラガミの声はこいつらではなかったようだ。その、『やばい奴』が来る前に片づけないとまずいらしいな。

「準備は万端だよ、サクヤさん」

「いつでも出られます」

そしてサクヤさんは笑みを浮かべる。それが合図だった。

「任務開始！」

「榊レキ」

「あと、一体だな」

「えっと、どっちだろ、……あれ、あれ？」

コウタは突然マップを見て焦っているようだ。あっちを見たり、こっちを見たり。一体どうしたというのだろうか。

「どうしたの、コウタ？」

「いやその、マップが訳の分らないことになってて」

自分のマップを確認したが、別に変なことになっている様子はない。コウタのマップを見ると、……ぐちゃぐちゃで、何が何だか分からない。

「まさかコウタ、壊したわけじゃないよな？」

「違うって！ 確か、このコクーンメイデン……だっけ。背後から攻撃してて、いきなり肋骨が飛び出してきたのを喰らった後から見えなくなっちゃって」

コクーンメイデンの肋骨には神経性の毒が含まれているらしい。

主に視覚に影響するらしいが、このような形で現れるとは驚きだ。

「これはきつと、ジャミングね。抗ジャミング剤は持ってるかしら」

「いや、そもそも渡されてないからどういふものか分からないよ……」

……

それなら自然回復を待つしかないと、サクヤさんは言う。溜め息をつくコウタに、俺たちがカバーするから少しの間我慢しろ、と励ました。

「　　ときにコウタ、一応言っておくが。……助骨じゃない、肋骨だ。読み間違えないよう気をつけることだな」

コウタが信じられない、と言いたげな顔をする。まあ読み間違いは誰にでもある。

「さて、残すは後一体。『やばい奴』が来る前に早く片付けよう。捕喰して十分にアラガミバレットも溜まっているから、有効活用させてもらうとしようか。サクヤさん、後ろは任せましたよ」

「了解よ」

俺は軽い足取りでコクーンメイデンに近づく。向こうもこちらに気づいたようで、ジャベリンを飛ばしてきた。それをステップで回避し、背後をとる。

4回の切断攻撃からの銃形態への変形、そしてレーザーを1発ぶち込んで、反動で全方位攻撃をかわす。ここまでは思惑通り。さて、あと何回繰り返し返せば倒れるだろうか？

その時、背後から自動ホーミングレーザー弾とホーミング通常弾が、数発ずつ飛んでくる。援護射撃か、これはありがたい。さあ、次はどう攻めるか？

……コクーンメイデンは攻撃してこない。ならばこちらから仕掛けよう。まずは、ジャンプ3回斬りからの急降下突き、再び3回斬り、そして捕喰。バーストモードに移行して、さらに攻撃の手を早める。為す術もなく、コクーンメイデンは腹を開いてダウンする。

さて、俺ばかり活躍するのは気が引けるな。

「コウタ！ リンクバーストは知っているかッ?!」

「うん！ それがどうしたのっ!?!」

俺はジャベリンを2発、受け渡す。コウタはそれを受け、リンクバースト状態になった。

「これが、リンクバーストね。初めてみるけど、コウタ、大丈夫？」

「はい！ よおし、みなぎってきたー!!!」

変に調子に乗り始める。それだけ、リンクバーストの力は恐ろしく強大なのだろうな。そして、コウタは力を込めて、引き金を引いた。

「すごい喰らえーッ!!」

最早頭のねじが緩みかけているレベルではあるが。『濃縮ジャベリンレベル2』は天を貫き、コクーンメイデン目掛けて地ごと貫く。

……その一撃でコクーンメイデンは力尽きた。

「すごい威力だな、……間近で見ている、恐ろしいと感じるほどだ」
それにしてもこのコウタ、ノリノリである。俺は一通りの捕喰を済ませて、迎えのへりを待つことにする。

「もうすぐ来るみたいだけど。」

ところでサクヤさん、さっき

言ってたやばい奴って何？」

「いずれ戦わざるをえない時が来るかもしれないから話しておくわ。」

……そいつは、ここ嘆きの平原にしか出現することはないの。その名は、ウロヴオロス」

名前からして、おどろおどろしい。肝心の見た目の方はどうなのだろうか。

「体躯は悠にこのフィールドの大部分を占めるほどね。高さもそれなりにあるわね」

「っ、大きすぎるっ……！ 確かに、そのようなアラガミが出たらひとたまりもないな……」

出会ったら即刻逃げなければ危険だ

む？ この赤い小さな

四角はなんだろうか？

「この四角？ ターゲット以外のアラガミよ。……それってまさか」

俺は、いや、たぶんここに居た全員が何かに祈った。予想が外れているようにと。しかし、やはり神なき時代に願いを聞くものなど、……いないと言っことを思い知らされた。

ドズン、ドズンと、背後から地鳴りが響いて、足がガクツとなる。まさかとは思ったが、ゆっくりと、ゆっくりと俺たちは振り向いて振り向いて、振り向いて振り向いて振り向いて振り向いて。

その体軀は確かに巨大で、俺たちの手に負えないことは明白であった。

「へりはまだかしら。もうそろそろ来てくれないと、困るわね」

「リンドウさんは確かなんて言っていましたっけ？ よし、コウタ。言ってみろ」

「うん。逃げるな、」

「それは違う」

逃げなきゃ死ぬだろうが。っと、そうこう言ってる隙に、ウロヴオロスはこちらへ向かってくる。太刀打ちできるわけがない。だから俺たちはリンドウさんの受け売りで、戦略的撤退を決め込んだ。

地面から襲い掛かる触手のようなものを避けながら走る。どこまでも、どこまでも奴は追ってくる。幸いあまり速度はなさそうなので円形状のステージをレースゲームのごとく駆け回る。時々方向転換をしながら逃げ続け、目が回りかけた時に、待ちわびていたへりが到着したのが確認できた。

「はあ、ふう、……やっと来たみたいね」

「ハア、ハア……た、助かったあゝ」

「……がふあつ、げほつ、……や、……やっと、うごほつ、……き、来たかつ……げほつ、ごほつ……」

「レキ、大丈夫？ 息が大変なことになってるみたいだけど」

まずコウタが、次にサクヤさんはコウタが手助けしてもらって、最後に俺は二人に手伝ってもらって（実質引き上げてもらったわけだが）、高台に上る。そしてへりは平原を去った。

ヘリが飛び立って、ようやく息が整ったところで、俺は思ったことを口にする。

「いずれ。……いつかは分からないが、いずれ倒すべき相手になることは、間違いないな」

「ええ。そのためには、たくさん経験を積む必要があるわね」

いつか、あいつを倒して、
答えを見つかる。俺が選んだ道が誤っていなかったことを証明してみせる。

「ひくしょい！」

と、コウタがムードをぶち壊す。というか、少し寒いな。吹き込む風が冷たい。

「濡れたままでいると風邪ひくわよ。はい、タオル」

サクヤさんにタオルを渡された。これはありがたい。……それにしても、ヘリコプターに乗ったのは今日が初めてなのだが、ドアがこんなに簡単に開くとは思わなかった。下を見ると本当に生きた心地がしない。このまま落ちてしまうのではないかと、少し不安になる。

「今日の辺りにいるのかな？ うわっ、瓦礫ばかりでよくわからないや」

コウタがそう言ったので俺も窓の外を見てみることにする。コウタの言ったとおり、よく分からない。この地に本当に昔、人が住んでいたのかすら、疑われるほどである。

ん。それにしても、……気持ち、悪いッ……。

「とにかく、みんな目立つような怪我もしてないし、よかったわ。

次もこの調子でいきましょうね」

「うん、それじゃあ次も頑張ろうぜ、レキ
あれ、どうしたんだよー、レキ？ おーい、大丈夫？」

そしてしばらく、俺は乗り物酔いの恐怖と苦痛を味わうことになった。

2・OPEN FIRE（後書き）

さてさて、ようやく新型2人が初任務ですね。サクヤさんに今回は協力していただきました。ありがとうございましたー。

この流れ、次回はまさか例の人物が登場するか！？ さて、生きるか死ぬか、全ては頭上にかかっている！！ 次回、『華麗なるエリック伝説！』、お楽しみに！

冗談です、すみません。しかし、次回には登場するはず。もちろん任務へはあのキャラも同行するからね。あとは新型キャラももう一人投入すれば豆乳鍋の出来上がり。

それでは次回まで。

3・STRANGER

***** 輸送用へり内

「N/A」

……オレは目を閉じる。……何も見えない。ただ、バラバラとロ
ーターが高速で回転する音だけしか、聞こえない。……本当に退屈
だ。

オレは、操縦士に現在地について質問する。彼曰く、現在患者の
空母の上空を通過中らしい。目的地まではまだまだのようだ。

仕方なくオレはヘッドフォンを耳に当てて、再生ボタンを押した。
……だけれども、邪魔な音は消えない。

やっと、戻ってこれた。長かった。本当に長かった。何度悔やん
でも、この心が癒えることはないだろう。謝ってももう遅い。……
オレが強ければ、あんなことにはならなかった。

これからやることは、復讐。ただの自己満足。それでも、
『彼ら』の弔いになるのなら……自らの手を血に染めることは厭わ
ない。それが、『オレたち』の罪だから。

不意に機体が揺れる。俺は目を開いて、辺りを見渡した。

……どうやらアラガミの襲撃のようだ。ザイゴート数体、それら
を統率しているのはサリエル、いずれも墮天種ではない。へりに備
え付けられた対アラガミ迎撃用オラクル銃も、ここまで多ければ相
手にできそうにない。

死の覚悟？ そんなものはいらない。ここでオレが、オレ
タチが死ぬはずなど、ないのだから。

……『彼』はこんな時でも悠長に寝ていられる。そして、サリエ
ルのレーザーが操縦士を貫いて、ザイゴートたちは機体前方を一斉
に捕喰する。

動力を喪失したヘリは重力という物理法則に従って、殺伐とした
大地へ、空母へと落下していく。

この高さから落ちてしまえば、間違いなくこの地に肉片一カケラ
余さず捧げることになるな。回避するには、タイミングよくヘリか
ら飛び降りる必要があるだろう。運が良ければ骨の一、二本で済み
そうだが、タイミングを外せばオレタチはまず死ぬな。

と、『彼』がようやく目を覚ましたようだ。そして、事態
の深刻さに少々焦っているようだが、幸いにもオレタチは、身動き
がばっちりとれる。

そして、地上が見えてきた。オレが地上に近づいているのか、地
上がおれにぶつかって来ているのか。そんなことはどうでもいい。
ただ、オレタチは生きるために……死ぬために、生きている。寿命
を削ってまで、生きて、死のうとしている。

「 本当に、莫迦野郎だよ、……オレタチは」

本当に馬鹿だなあと、『彼』に嗤われる。別に構わない。生きる
ためなら、莫迦者と罵倒されようが、痛くも痒くもなんともないか
らな。

そして地上がおれの目先10メートルほどになる寸前に、オレタ
チはヘリから飛び出した。舞い降りるようになって、そんなにきれ
いには降りられるはずがなく。だから、どしゃつと足から、そして
ガクツとへたり込んで頭を突っ込んで、……ガシャンと大層な音と

ともにヘリが落下して、それでおしまい。

そして、破れた燃料ボックスに火花が散り、大炎上。あとはこの血塗れた体がどれだけ持つか、そして誰かがあとどれくらいいたら来るかだが。

「あの、何か落ちる音がしませんでしたか？」

「そうか？ 別にそれらしきものは」

オレは運がいい。既に誰かが近くにいたようだ。だから、安心してオレは四日ぶりの睡眠をとることにしよう。それじゃあお休みなさい、また誰かが起こしに来るまでオレは寝る。というか、頭を打ち付けた衝撃で、意識が朦朧としていて、うつらうつらとしてきた。

「だ、大丈夫ですか?! えっと、そうだ、……」

……騒がしい奴らだな。そう思ったのを最後に、意識を保っていることが耐えられなくなって、オレは再び目を閉じた。

0857 自室

「睦月ケイスケ」

帰宅して、報酬を頂戴して、ツバキさんの話を聞き流して、病室で手当てをしてもらって、エレベーターで新人区画まで行って、ドアを開けて、……ようやくベッドに倒れこむ。とっくにスタミナは切れかけていた。まあ少し休めば回復したわけだが。

朝食は既に摂ったし、1時間後にはサカキ博士のありがたいお話があるそうだが、それまですることは一切ない。眠気があるわけでもないから、とりあえずその辺をぶらりと歩くことにする。ついで

に、あいさつ回りというのもいいだろう。

そして部屋を出て、……新人区画の静けさに、少し不安を感じた。とりあえずエントランスで時間をつぶそう。そう思って、俺は自室の扉の鍵を閉める。

0900 エントランス

「睦月ケイスケ」

ソファで座って寛いでいると、誰かが来た。えっと、確か彼の名前は　　タツミさんだったっけ。

「ん？　ああ、新入りの。ケイスケだったな、確か」
名前を覚えてくれて助かった。そして、俺の腕の傷を見て少し心配しているようだ。

「大丈夫ですって。ただのかすり傷かすり傷、あいたた」
あの程度の侵喰ならもの数日で完治するらしい。だがあまり無理をしないことが大切だそう。ごもつともである。

「そういえば、ここへ来た時からずっと気になってたんですけど。そちらの女性は？」

受付にいる女性だが、彼女は何をしていて、誰なのだろうか。タツミさんが答えようとすると、彼女が直接答えてくれた。

「私はここフェニル極東支部のオペレーターを務めています、竹田ヒバリです。ミッシヨンの受注や外部・内部からの通達などは私がすべて承っております。何かあったら気軽に声をかけてください
ね」

ヒバリさんの顔を見る。そして、タツミさんの顔を見る。
そして、またヒバリさんの顔を見る。

「……いや、ないか」

「何がだッ!!」

タツミさんに突っこまれた。そういう反応をしたってことは、やっぱり二人の関係って、

「ん？ あ、はい。……そうですか、分かりました。それでは。……どうやら残りの二人も帰ってきたみたいですよ。ちょっとした災難に遭ったみたいですけど」

「災難？ やばい敵みたいなのが出たとかそんな感じかな……」

俺がそういうと、どうやらビンゴだったようだ。ウロ何とかわつていうアラガミに追っかけられたらしい。そりゃ災難だ、よく分からないが。

と、ゲートが開いてサクヤさんとあいつらが入ってくる。

「くっ、やはり既に帰っていたのか。しかし、俺たちがミッションに出ていた場所の方が遠いから当たり前だな」

何負け惜しみみたく言ってるのさ。

「あれ、怪我してるみたいだけど……大丈夫？」

「まあ、別に軽いケガだし、つば付けときゃ治るさ」

そして、サクヤさんがツバキさんのところへ一緒に報告に行きましようと思いをかける。そして、一時的だが別れた。同時にタツミさんも自室に戻るようなのでエントランスから離れる。

カタカタとキーボードを打ち雑務に追われるヒバリさんと、ソファアに座って暇を潰している俺。打鍵音と、自動販売機とターミナルの稼働音以外、何も聞こえない。……そして、ピリリと連絡が入ると同時に、リンドウさんが外から戻ってきた。どうやら煙草を吸っていたようで、少し煙臭い。

リンドウさんは俺に、お疲れさんと言った。だから俺もお疲れ様でしたと返した。

「で、今回のミッションはどうだった？」

「あ、えっと。……やっぱり、頑張らなきゃなー。あと、自信過剰にも注意　　みたいところで」

そして彼は、気楽に頑張ろうや、と励ましてくれた。気楽にできればここまで苦労はしないんだけどなあ……。

と、通信を終えたヒバリさんの顔が険しくなった。

「どうしたんだ、ボーイフレンドと喧嘩でもしたのか？」

「そんなんじゃないかもしれませんっ。……地下の対アラガミ装甲が破損していたようなんです。何か良からぬものが入ってきていなければいいんですけど……」

良からぬもの。まあアラガミのことで間違いなさそうだな。

……リンドウさんも自室に戻るようだ。またエントランスは俺とヒバリさんの二人になってしまう。さすがにいつまでもエントランスで時間を潰すのは不精だと思って、俺も自室に戻って退屈な時間をテレビでも見ながら過ごすことにする。

「　　ん？ エレベーターが来ないな」

壊れてしまったのだろうか。しばらく待ってみたが、やはり来そうにない。

「技術開発部に連絡入れときましようか？　　すぐに修理に来ると思いますよ」

「ああ、そうしてくれるとありがたいが　　お、やっと来てくれたみたいだ」

「うーん、何か嫌な予感がする」

そう思いながらドアが開くのを待った。……そして、ドアが開いたので中に入ろうとする。

「あれ？ なんだこいつ」

こけしのようなドでかい何かがぼつんと一個。リンドウさんは俺の腕を引っ張ってそいつから引き離す。そしてドアが閉まると、…鋭い棘のようなものが、金属のドアを貫いた。

「な、なんだあれ、も、もしかして、あ、アラガミ……？」

「ああ。あいつはコクーンメイデン。まあ、小型のアラガミだから脅威は小さい。だからと言って油断していると痛い目にあるから、気をつけるよ」

そしてリンドウさんが神機を持ってきて、サクッと倒してしまっちなみに、こいつ　コクーンメイデンは、一体出てきたら十体は出るらしい。こいつがまだ九体はいるかと思うと、少しぞっとする。

忘れてしまった方がよさそうだ。とにかく、自室に出てこないことを祈る。

0948 エントランス

「榊レキ」

「なんだというんだ、怖いというべきか心臓が止まりかけたというべきか……」

「寿命が一、二年縮んじやったよ……」

ツバキ上官と話していると、突然間からぬつとコクーンメイデンが生えてきた。ツバキ上官がサンドバッグよろしく殴ったらしばらく気絶してしまったようだ。ツバキさんって本当に人間なのだろうか？ 無論、そのあとは俺の神機で駆除しておいた。

た。

「な、君は神っ！　なぜ君がここに　　そ、その腕輪はっ！！」
わざわざしつかり見えるように腕輪を見せてやる。驚きっぷりが懐かしくて、そんな彼が見れて少しうれしかった。

「今では俺はお前の後輩だがな。だけどよ、昔と変わらない関係でいようぜ」

そういうと少し機嫌がよくなった。すぐ調子に乗るとこれだ、お互い様だが。まあ憎めないからよしとする。

コウタが少しこちらを見ている。　　彼とは大抵インフォーマルな話し方をしているから、意外だったのだろう。

「知り合い？」

コウタが俺に訊いてきたから、俺はエリックに自己紹介を促した。
「僕はエリック。エリック・デア」フォーゲルヴァイデ。もちろん、君の上司であり先輩さ」

「こいつとは昔っからの付き合いでだな、……まあ正直言っちゃあ腐れ縁なわけだが」

たまたま家が近所で、たまたま親同士の付き合いが多かっただけだ。だが、たまたま遊んでいたわけではない。お互い遊び相手として十分気に入っていた。もっとも、年齢が近かったという理由もあったわけだが。

昔は、射撃勝負と称してモデルガンを二丁持ってきて、缶や瓶を撃ち合ったものだ。ちなみにはば互角だったが、勝った回数は微妙に俺のほうが多い。

ときどき友達全員で集まってサッカーをしたが、知識だけの俺は全くダメダメだった。こいつにはいつも負かされたものである。エリックシュートは俺たちの中では『最強の必殺技』だったわけだ。もう一度聞いてみたいものだ。

「とりあえず、よろしく願います、……えっと、」
「僕のことはエリックと呼んでくれて構わない。もしミッションと一緒にいることがあったら、露払いは任せたよ」
相変わらず上から目線である。そしてプライドも人一倍でかくなっているみたいだ。でも、変わらないでいてくれて、少し安心した。

「……ところで、一つ聞いていいか？」

「ああ、構わないさ。何でも聞きたまえ」

フォーゲルヴァイデが入隊したとき、窓の外からその様子を見送った（直接見送りはなかったが、『勉強の時間』のおかげで許されなかった）。だが、一緒に、近所の『あのガキ』がいるのを見た。そして俺は理解した。あのガキも、入隊するのだと。

「あのガキ、どんな調子なんだ？」

「あのガキ……、あ、ああ、彼のことが。元気そうだよ」

フォーゲルヴァイデは、少し言葉を濁す。コウタは『あのガキ』が誰か分からないようだ。俺たちだけの内輪話だから仕方ないか。

と、そこへダルそうな顔をしながらケイスケが現れる。

「あー、やっぱり自室は退屈だーッ！ お、レキ、コウタ、……と、こっちは誰だ？」

「僕はエリック、エリック・デア」フォーゲルヴァイデさ。君の先輩で、彼の知り合いさ」

簡素な自己紹介を済ませた（これでケイスケが納得するかどうかは別として）エリックに、ケイスケは握手を求めた。

「君も、僕を見習って華麗に戦ってくれたまえよ？」

そしてエリックとケイスケの手が触れる。

が、ケイスケの手は不意に払われた。誰に？ ああ、『あのガキ』以外の誰でもない。

「師匠の弟子は、俺だけだ」

……無論、フォーゲルヴァイデがこいつを弟子に取っているわけではない。こいつの思い込みだ。

「ヨシツグ。……まだ君を、弟子に迎えてはいないし、弟子にするつもりもない」

「なら、今すぐ弟子にしてください。師匠のその、華麗なる伝説に俺は、魅せられてしまった！ だから俺は、俺は師匠の弟子なんです」

何を言っているのかさっぱりだ。こいつ、俺が見ない間に一体どうしてしまったんだ？

いや、彼のフォーゲルヴァイデに対するあのような態度は、今に始まったことじゃない。彼は昔からそうだった。誰彼構わず見下したが、フォーゲルヴァイデだけは、いつも尊敬の念を込めて接していた。実際、あのフォーゲルヴァイデもこんな感じ（いや、ここまで酷くはなかったか）だったせいもあるのだけれど。

しかし、ここまで彼が歪むとは……一体俺の居ない数年の間に、何があったというんだ？

「何度も断ったじゃないか、確かに僕は師となる器であると自負しているさ、君も僕を師にあおぐ器がある！ だが、君と僕とは方向性が全くと言っていいほど違う……すまない、どうか、華麗なる僕を許してくれたまえ……」

何とも思えばりである。少々自惚れすぎてないか？ ……たぶん建前だな、建前に違いない。

そしてしばらく経って、ギリリと歯ぎしりが聞こえた。彼は背を

向ける。

「絶対に、弟子になりますから。師匠」
そう言って、エレベーターを待つ。そしてケイスケは問う。

「どうして彼を弟子にしてあげないんだよ？ 形式上でも弟子にするって言ったほうがよかつたんじゃない？」

「彼の神機はアサルト。それに対して僕はブラストを使って数多の華麗なる伝説を作り上げた。僕には、彼に教えることなど、……教えられることなど、一つとしてないのだよ……」

一瞬、奴の体が強張るのが見えた。……そしてドアが開いて、吸い込まれるようにして彼はエントランスを去った。

「なあ、あいつ誰なんだ？ 華麗なエリックはヨシツグって呼んでたけど」

『華麗な』を付ける必要性について問いたいが、質問を質問で返すのは失礼にあたる。

「前田ヨシツグ。ケイスケたちと同じ年だ。フォーゲルバイデと一緒に彼は入隊し、今まで戦ってきた。……さすがに、俺は彼がここでどのようなことをしたかは知らないがな」

フォーゲルヴァイデに彼について聞こうと思ったが、主観的になつてしまいそうだから、あまり会話をすることのないと思われるオペレーターのパレーターのヒバリさんに聞いてみた。

「え？ ……そうですね。彼に私もよく苦労させられます。何かと難癖をつけることもあれば、ないものねだりをする。オペレーターは機械のように黙って人に言われた通りのことをしていれば良いと言われたこともありますし……」

彼らは、彼がどのような性格をしているか、よく分かったようだ。「恐らく、奴はこの支部のほとんどの奴を敵に回してる。親の七光とは言ったものの、時代錯誤が甚だしいな」

「ななひかりつて、なんだそりゃ？ 臨兵闘者皆陣烈在前？」

「ケイスケ、それは九字だ」

なんというマニアックなものを……ニンジャというものに興味があるのだろうか？

「必殺技みたいなものだよ、必殺・セブンスパーク！ とか」

……呆れてものも言えない。ネーミングも少々陳腐だ。

「華麗な僕が説明しよう。ヨシツグの祖父は、ここが日本と呼ばれていた頃、内閣という政治機関のトップ……要するに大統領のようなものだった」

「ダイトリョー！ ひえーっ。そんな奴の孫だったとはびっくりだぜ。……で、あいつが偉ぶってるのとどうい関係があるんだ？

それを聞く限りじゃ、天狗になってるとしか思えないな」

「要するに、そういうことだ。もう、この国 いや、この世界に、トップに立つべき人間など、居ても居なくても同じようなものだからな。実質ここが日本だとすると、トップはここアナグラの支部長だろう」

「　　っと、もうすぐ博士の講義の時間だよ。研究室へ行かないとね」

「それじゃあ、また後でな」

俺はフォーゲルヴァイデに手を振って、ラボラトリへと向かう。今日の講習はどんな話になるのだろうか？ 楽しみで仕方がない。

一服して、戻って来てみると少し騒がしいことになっていた。なにやら輪のような人ばかりができています。

「どうしたー、何があつたんだ？」

サクヤがこっちに気付いたようで、見てないで手伝いなさいよと言われた。

「いや手伝えつたつて。一体何があつたんだ？」

すると当事者のカノンは、何があつたかを短絡的に口走った。

「そ、空から、空から降ってきたんですよッ！」

空から降ってきた？ 新種のアラガミか？ それとも、救世主か？

……そんなものはいないか。

なんとか見ることが叶ったわけだが、一人の青年が倒れていた。

……まだ幼さが残っている。子供であることは間違いない。そして、腕輪を見る限り神機使いであることも分かった。

「えっと……その神機使いは誰だ？ その降ってきた奴にでもやられたのか？」

とりあえずぐったりとしている彼を指して尋ねる。降ってきたものにぶつかるなんて、相当運が悪いんだろうな。

「違いますって！ だから、彼が降ってきたんですよー！！」

「何言つてんだ、冗談はよせやい」

「リンドウ、これは本当の話よ」

サクヤにたしなめられ、とりあえずはまず彼女の話の聞くことにする。

彼女が言うには、フェンリルが所有する輸送用ヘリの残骸のそばにいたそうだ。アラガミに撃墜されたようで、近くにいたアラガミはすべて掃討したらしい。

操縦士はすでに捕喰されていたが、彼はこのとおり無事だった。そこへヒバリが新しく入った情報を話す。

「ヘリコプターは操縦士のIDから南米支部のものだと判明しました。この青年についても現在問い合わせています」
さすがここ極東支部のオペレーター、対処が早いな。自分のことのように思えて鼻高々だ。

「リンドウ、彼を病室に運ぶのを手伝ってくれるかしら」

そういうのは若い奴に任せておけばいいものを。……まあ、俺もまだまだ若い。しかし、直々に指名されたのだから仕方ない、諦めて手伝うことにする。

「妙に厚着だな。確か南米地帯の気候は著しく暑いと聞いたが、脱がせてやった方がいいんじゃないか」

「確かにそうね。 あら」

上着を一枚めくると、もう一枚パーカーを着ていた。それはいたって普通である。……だが、そのパーカーには、グルグルと何重にも『鎖』が張り巡らされていて、鎖のそれぞれに錠前が「一、二、三」とついていた。それは、喻えるならばそう、『封印』。

「近頃のファッションって、変わってますね」

「これはファッションじゃないと思うわ。……ほら、ソーマも手伝って」

「断る」

本当にこいつは。……だが、彼も人の身だ、いつか打ち解けてくれるに違いない。

彼が『死神』と蔑まされる日も、……終わってくれるに、違いない。

「睦月ケイスケ」

「遅いな」

「なあにがちよつと出ていくだ！ 大人のちよつとはこれだから信用ならない！」

早くも痺れを切らした俺は研究室を出る。そして、たくさん人が集まっている病室を確認しに行った。

「ちよつと待つてよケイスケ、講義嫌だからラッキーって言ったのはどこの誰なんだよ！」

「こいつの心は秋の空並みに変わりやすいな。 ん？ こいつ、誰だ」

頭に包帯が巻かれていて、足にテーピングがされている。そして、左腕に腕輪が確認できた。

「神機使用いか。でも異動の話とかは一切聞いてないな。博士は知っていたんですか？」

「ん？ ああ、彼の異動かい？ 知っているよ」

「知っていたんですか。俺たちには伝わっていませんが……。それに、このような大怪我をするなんて」

異動の際にこんな大怪我をすれば、やはりヘリがアラガミに襲われたのだろうか。よく助かったな、すごいすごい。

と、リンドウさんが姿を現した。

「上様、もとい支部長が伝え損ねたみたいだ。しかし、どこか様子がおかしかったようだが……」

なんだ、そういうことか。宣伝部長もおつちよこちよいだな。そして、リンドウさんは他にも彼についての情報を話した。

彼の名前はウィラード・カーライル・シヤムロック（長い名前…

…）。愛称はウィル（こっちはこっちで短くて言いやすい。仲が良くなったらぜひそう呼びたいな）。性別は男（見りゃ分かる）。

俺とレキと同じ新型神機使い（同じ支部にこんなに居ていいのか？ 確か新型は稀少とか言ってたけど）。ただし腕輪が左についていることからサウスポールのようだ（珍しいなあ）。

異動前は南米支部配属（確かすごく暑いんだっただけ。俺だっただけで絶対行きたくないな）。相当な戦績を収めていたようで、彼を手放すのは相当惜しかったようだが、彼が行くことを望んでの決定だそう（一度どんな戦い方か見てみたい）。趣味は音楽（音楽プレイヤーには俺が聞いたことのないような曲ばかり入っている。えっ、これは何語かな？）と、寝ること（寝ることが趣味って……）。

「それで、やっぱりケガの影響で意識を取り戻さないでいるのかな？」

「見る限り血色はよいようだが。……てか今一瞬いびきが聞こえたような。」

「ただ寝ているだけだ。あちらさんの話によると、こいつ四日間ぶっ続けて任務に行っていたらしい。ベテランの俺が言うのもなんだが、よく精神がもったな」

歳は、身長からして俺と同じくらいだと思う。本人が言わないと分からないが。それにしても、四日間も戦い続けただなんて。俺だっただけと一日ともたないかもしれない。

「とりあえず君たちは研究室に戻ってくれ。講義を再開するよ」

「あ、すっかり忘れてた。でも博士、エイジス計画の話はもう聞き飽きたって」

俺がちよつと文句を言うと、博士はやはり笑顔で言う。

「まあまあ、これから面白い話が始まるから、期待して聞くようにね」

「オトナツて、ヤツぱりそういうところで嘘つくんだよなア」

？ ……レキが言ったかと思っただが、彼は言っていないよ
うだ。 ……この場にいた誰もが、誰がその言葉を発したか分からな
かった。例の彼かと思っただが、高いびきで完全に寝ている。寝言か？

「 ……まさか、な」

「ほらほら、お前らも帰った帰った、ここは見せ物屋じゃないぞ」
次々とリンドウさんに追い返されていく野次馬。それに続いて俺
たちも退室して、再び研究室で博士のあまり面白い話を聞かされ
れることとなった。レキはとてもよく聞いていた。不思議不思議。

1 2 4 3 自室

「睦月ケイスケ」

「んつくんつく、 ……ぷはあ」

息抜きのコーラはやっぱりうまい。

「ケイスケはコーラが好きなんだな」

「そりやもし飲めるのなら十本でも二十本でも飲むほどにな。さす
がにそこまでは飲めないが」

飲めないなら言うなっ、と突っ込まれる。ちなみにレキは炭酸が
苦手だとか。普段何を飲んでいるのかと聞いたら、どうやらコーヒ
ーらしい。大人っぽくて少し憧れるなあ。 ……だけどコーヒの苦
さが好きな理由がちょっと自分には理解できない。

「たいていこの自販機でコーラ買っていくんだよね。」

あ、

ほらあの人も絶対コーラ買うね。断言できるよ」

フードをかぶった男。レキは絶対にありえないと言い切ったが、……彼はコーラを買った。

「な、言ったとおりだろ？」

「何がだ？」

ぎろりとこちらを睨んでくる。いや、その、……悪かったというか、うん。俺は目をそらした。

……鼻であしらわれると、次に彼はレキのほうを見る。そして彼に歩み寄った。

「そのルーキー。名前は　　どうでもいいが、ミッションに行しろ。……そういう命令だ」

名前がどうでもいいって言うのは俺でも少し腹が立つ。名前は大切な家族から貰った宝物だからな。

「ええ、……はい」

「早くしろ、エリックたちが待っている」

とりあえず腑に落ちない表情をしながらも、レキは男に付いていた。

「……誰だあいつ」

「おいおい、行っちゃったぞ、止めなくていいのか？」

「そんなの迷信だ、ただの噂に引っ張りまわされるなよ」

後ろから会話が聞こえたので、ちよつと振り返ってみる。

「あ、よお。お前、新しく入ってきたやつだよな」

「あ、あ、うん。そうですけど」

とりあえず二人は自己紹介する。別に訊いたわけでもないつてのに。こっちはこっちでおかしな奴らだなあ。

とりあえず、シレッとした方がカレルで、子供っぽい（人のことを言えたわけではないが、なんとというか年不相応というか）方がシユンというらしい。

「んで、止めなくていいって、何かまずい任務にでも付き合わされるとか？」

「まあそんなところだな。なんせあいつの任務の同行者は、」

「だからそれはただの迷信、偶然だ。そんなものを信じているだなんて馬鹿馬鹿しいな」

それを聞いてシユンはカレルに突っかかる。喧嘩ならよそでやれよ。

「あいつと同行してるのが死神っていう時点でやばいんだよ。ほら、フードかぶった男だ、分かるよな？」

「はあ、死神？ んなバカな」

「ああ、こいつはバカだ。偶然同行した奴らが戦死しただけのことを、勝手に面白おかしく囃し立てやがって。戦闘中の不注意で死んだだけだから、あいつがどうこの話じゃないと思うんだがな」

「いや、俺が囃し立てたわけじゃねーよ。俺も誰かが言ってたからそうじゃないかと思っただけで……」

本格的に口喧嘩が勃発。とりあえず俺はさっさと退避することにする。

「……死神、か」

確かに、あの眼光は怖かった。人間の心地がしなかった。……もちろん、シユンの言ったことを信じているわけじゃない。……もしかすると、ただ信じたくないだけかもしれない。あの男は、本当に死神なのだろうか？ あるいは……。

心配になった俺は、とりあえずあいつの無事を祈ることにした。

何に祈ったのだろうか？ 神亡き時代に祈る対象など、いる筈がないのにな。

「榊レキ」

「フォーゲルバイデも同行するのか」

「榊、昔から言っているが、君は正しい発音もできないのかい？

僕の名前はエリッククィデア・フォーゲル『ヴァ』イデだ」

「だからちゃんと喋ってるじゃねえか、フォーゲルバイデだろ？」

「だから よし、榊。ヴァイオリンと聞いたまえ」

「いいぜ、言つてやるよ。ヴァイオリン」

俺はとりあえず付き合つてやることにした。

「ヴァイデオ、ヴォイスパーカッション」

「こんなことをさせる意図が分からないな。ヴァイデオ、ヴォイスパーカッション。どうだ、満足したか？」

理由はもちろんわかってる。そして、彼は一呼吸おいて言った。

「フォーゲルヴァイデ」

「フォーゲルバイデ」

「……もういい」

拗ねてしまった。彼を弄るのは面白いな……だがちょっと刺激しすぎたか。

「ところでだ、フォーゲルバイデ。あの男は誰だ？」

「ああ、彼は」

「そろそろ時間だな。……おい、一人足りないぞ」

フードの男が苛立たしく言う。俺とエリックと彼の三人じゃないのか？ 確か一度の任務につき最大4人までだったが、あと一人来るということか。

「……で、その一人が来ないわけか。時間ぐらいは守ってくれなくては困るな」

そして、『彼』は来た。

「すでに時間は過ぎてている、前田。時間ぐらいは守れ」

それ俺のセリフそのままじゃないか。しかし、よしとする。……いや、よくない。どうして同行者がこいつなんだ？ 納得いかないな。

「俺自身が志願したんだ。悪いってのか？」

「ああ、悪いな。自分から申し出たのなら周りの奴のことも考えろ、ガキが」

すると奴は鼻で笑った。……そうか、俺のほうが階級が低いうえに、経験の差、だろうな。しかしながら、それとこれとは話が別だ。

「ところで、フォーゲルバイデ。お前、確か頭をよく打っていたよな。サッカーの時だって当たり所が悪くて失神していたしな。というわけで頭上に注意だ。俺のワンポイントアドバイス」

「な、失敬な！ サッカーの件にしる全部君がやったことじゃないか！」

否定する気はない。確かにさ、サッカーは苦手なんだ、こんな俺を許してくれ。

とうとうフードの男がキレた。待たせすぎたもんな、さっさと行くとするか。

1252 神機整備室

「榊レキ」

俺たちが使っている神機は、ここで整備されている。出発前にここで神機を受け取って、帰投後にここへ渡す。整備が行われなけれ

ば、神機もすぐに壊れてしまう。ここで働く人たちは、陰ながら俺たちの活動を支えてくれていているわけだ。

「レキさん？ もしもしー、早く神機持っていきなよー」

「あ、あ、……すみません」

彼女は楠リツカ、ここで働いている。若くして働き出したため、その腕前は計り知れない。

彼女と初めて会ったのは、入隊当初（あの日のことは忘れない）、病室で目を覚ました時だった。辺りを見渡すと、一人の女性がいた。絆創膏を取りに来たようだが、異質な臭い（アラガミの血の臭い。その時はまだわからなかった）が漂っていて、ところどころ煤汚れている。

「あ、気が付いた？ほんとにさ、あれだけで悲鳴を上げるなんてこつちがびっくりしちゃった。君には、もっと強いアラガミと戦ってもらう必要があるんだから、ここで倒れてちゃいけないでしょ。」

……ああ、申し遅れちゃった。私は楠リツカ。君の、ううん、君たち神機使いの神機は、私たちが整備しているから。無闇に扱ったりしたら許さないからね。とりあえず、今後ともよろしく」

「あ、……はい……」

「それじゃあ私はこれで。さっさと自分のしなきゃいけないことをしなよー」

何かを感じた。俺が、閉じ込められていた家の中では感じられなかった想いを。子供のころにみんなで遊んだ時の想いとも違う、今までに一度も味わったことのない、想いを。

……過去を振り返って、あの時の思い出に少し微笑みながら、神機を取った。

「それでは行つてきます。……神機の整備、頑張ってくださいよ」
「はいはい、分かつてるよ」

彼女も微笑んで返してくれた。心が温まる。ゴッドイーターは、確かに大変な仕事だけれど、この場所を通るたび、やる気が出る。

そしてヘリへ向かおうとすると、後ろから罵声が聞こえた。

「おいおい、なんだよこれ？ あんなに綺麗にしてやったつてのによ、どういふことなんだっ！」

「あ、あれのどこが綺麗だつていふのっ？！ あんな神機だと戦闘中に滑つたりして危険だから、」

どうやら楠さんが揉めているようだ。もちろんあのガキと。

「なにがどうなっているんだ？ ヨシツグ、詳しく聞かせてくれ」

「……塗装スプレーだよ」

塗装？ ……神機に塗装したつていふのか？ ……奴が言うにはワックスコーティング用ラッカーを使用したとのことだが、そんなことをしたら神機が滑つて大惨事になりかねない。それを楠さんがワックスを落としたものだからこんなことになってしまったのだ。

「とりあえず落ち着きな、ガキ。またあいつが怒るじゃないか」

「黙れ、誰のせいだ怒っているんだ」

そして、フォーゲルヴァイデの説得で、ようやくガキをなだめることができた。……去り際に彼は言い残す。

「ヘンつ、本当に使えねえな、このクソ整備士が！ やっぱり女なんて姉ちゃんに比べたらこんなものなんだよ！」

……俺は、リツカさんに謝った。

「レキさんのせいじゃ、ないよ。私が、よく考えないでこういうことをしちゃったから……」

「リツカさんは、間違ってます。ぐうの音が出ないまで叩き潰して分かせてやりますよ。あつ、冗談ですから、気にしないでくださいね」

「早くしろ、置いてくぞ」

フードの男が再び怒り出しそうなのでさっさと行くことにしよう。……少し振り返って、リツカさんの背中が、とても悲しそうに見える。

1251 自室

「睦月ケイスケ」

「はあ、訓練所は全部使用中、受注できるミッションも今はなし。ずるいぜ、レキ！ というかツバキさんもツバキさんだよ。あれぐらいの任務なら俺でも行けるっての！」

ベッドに寝ころぶところがつてイライラ。コウタにバガラーの第二巻（定価：1600fc・六話から十話まで。といってもコウタは全部録画したらしいが）でも借りに行こうかな。

「の前に飯！。とりあえずこのでかいトウモロコシ！ どう調理すりゃいいんだよ？」

実はこれ、しばらく出しっぱなしにしまってカチカチに乾燥してしまっただ。まさかここまで乾燥するとは思わなかった！

ここまで乾燥するなんて知らなかった！！ 冷蔵庫に入れておけばよかった。

茹でるのか？ ああ、でもおいしくなさそうだなあ。

「おーい、ケイスケー。バガラリーの一巻だけど、」

「あ、ちょうどよかった。なあ、一つ相談があるんだが……」

1254 新人区画・廊下

「ウイル・シャムロック？」

一体オレは何をしているんだ？ 本当にくだらな。勝手に病室を抜け出して歩き回った拳句、ついには迷ってしまったとは。

「それにしても、南米支部とはだいぶ作りが違うな。まア、こついう知らないところを探索するのが面白いんだけど」

正直歩きにくい。足を負傷しているのだから仕方がないのだが。

「……ん？ なんだか香ばしい匂いがするな。ちくしょ、腹減ツてんのによ。こりゃ拷問じゃねエか」

匂いのもとのはあの部屋から。ドアが開放されている。そりゃここまで匂うわけだな。

……？ 悲鳴も聞こえてきたような。

「う、うぎゃあ、どうなってんだこれ?!」

「おいコウタ！ わ、わ、こぼれる、こぼれるっ!!」

……気になるし腹減ったしで、オレの好奇心がくすぐられた。と
りあえず覗きに行ってみて、ついでにお相伴に与ることにしようか。

3・STRANGER（後書き）

ああ、やっちゃった。まず意味不明な奴が登場して。次にエリックが登場して、やっぱり訳の分からない奴も登場して。……嫌な予感しかないというか、地雷というか。

エリックを生かすも殺すも作者の自由！ だけど、命を弄んではいけませんっ。全て、脚本の通りに物事を進めるだけ。その流れの中で誰が死んで、誰が生きるか。言ったらネタバレになってしまうしね。

何か質問や、気になったところなどがあれば、コメントでどんどん訊いてくれて構いません。所詮自分も人の子ですし、とんでもないミスをしてかしてるかもしれないですし……。

それでは次回まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2274z/>

GOD EATER -PL/RAYERS-

2011年12月12日23時49分発行